

山谷 侑士 選手・川本 梨誉 選手の紹介

神奈川県横須賀市出身。3歳からサッカーを始め、市立神明小学校に通いながら練習に励み、5年生、6年生時には横浜F・マリノスプライマリーのスペシャルクラスに所属した。神明中学校時代は横浜F・マリノスジュニアユース追浜で技を磨き、3年時にはU-15日本代表に選出。県立金沢総合高等学校に進学後は横浜F・マリノスユースでプレーし、3年時に2018Jユースカップで優勝を経験した。2019年に横浜F・マリノスへ加入し、ルヴァンカップ第3節V・ファーレン長崎戦でブロ初得点を記録。初年度にJ1優勝も成し遂げた。

2020年は水戸ホーリーホックに期限付き移籍。翌年、横浜F・マリノス時代のコーチが監督に就任した鹿児島ユナイテッドFCに加入。2022年は、元日本代表・中村俊輔選手など憧れの選手と共にプレーするため横浜FCへ。その横浜FCには日本トップレベルのベテラン選手が多数在籍しており、サッカーへの厳しい姿勢を学んだ濃い1年となった。

翌年、さらなる成長を求め海外挑戦を決意し、2023年シンガポールのゲイラン・インターナショナルFCに移籍した。初の海外でのプレーであったが、28試合12得点と結果を残し、自身としても自立心と国際経験を培った。2024年にはデンマークのABコペンハーゲンと契約し、24試合4得点を記録。異文化の中で挑戦を続けた2年間であった。

2025年8月にFC岐阜からのオファーを受け、チームの力になるべく欧州からの帰国を決意し、岐阜へとやってきた。加入後3試合目となる明治安田J3リーグ第25節FC琉球戦では泉澤仁選手の決勝ゴールをアシストし、勝利に貢献できたことを喜んだ。海外での経験から、日本選手も勝敗への熱量をより高め、意見を発する重要性を痛感している。夢はFC岐阜を昇格させ、その後J1でプレーし、再び海外の舞台で挑戦すること。岐阜は暑さを除けば住みやすく、妻と共に新たな生活を楽しんでいる。



写真：©Kaz Photography/FC GIFU

やま や ゆう し
山谷 侑士 選手 (25歳)

ホームタウン応援大使
海津市・輪之内町
ニックネーム
ヤマヤ、ヤマ

18
FW

静岡県静岡市出身、両親と2歳上の兄、現在高校1年生の双子の弟の6人家族。岐阜では妻と間もなく1歳になる娘と3人暮らし。岐阜は今まで所属したチームの中で最も静岡市に近く、住みやすく家族も喜んでいる。

静岡市立大里西小学校時代は少年団でサッカーを始めた。大里中学校時代には尊敬する兄が落選した清水エスパルスジュニアユースのセレクションにリベンジのつもりでチャレンジし、合格。これを機に本気モードでサッカーに打ち込み、中学3年生の時には「プレミアカップ」「クラブユース選手権」「U-15 高円宮杯」の3冠優勝を達成した。当時の監督の指導が素晴らしく、「初心を忘れるな！プロになれ！」の言葉の下、この代から6人のJリーガーが誕生した。

私立静岡サレジオ高校に進学し、サッカーは清水エスパルスユースでプレーした。U-16日本代表、U-18日本代表にも選ばれ、3年生時にはJ1の清水エスパルスで二種登録選手となった。トップチームの練習に参加しながら公式戦5試合にも出場し、地元のJ1クラブでデビューできたことが嬉しかった。

翌年にプロ契約し、最終戦のガンバ大阪戦で初ゴールを決め、勝利に貢献することができた。その後、J2のファジアーノ岡山、ザスパクサツ群馬、ブラウブリッツ秋田にそれぞれ期限付き移籍をした。この期間は怪我と向き合う時期もあったが、群馬時代の大槻毅監督(当時)には息子のように支えていただき感謝している。今回のFC岐阜加入についても「石丸監督の下なら成長できるから、楽しいサッカーをやって来い」と、大槻氏からの一言が背中を押した。

今後の目標は、先を考えず現実を見て年度ごとの目標に全力で立ち向かい、FC岐阜では少しでも上位を達成することです。大勢のファン・サポーターが応援してくれるチームなので、これをパワーにクラブ一丸で応えられるように頑張ります。



写真：©Kaz Photography/FC GIFU

かわ もと り よ
川本 梨誉 選手 (24歳)

ホームタウン応援大使
下呂市
ニックネーム
りよ

29
FW